

京都市の文化財保護行政とその歩み

梶川 敏夫

1. はじめに

この度、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文保課」という。）で初めて研究紀要が出版されることになったが、1970年に今の文保課が発足してから実に47年目のことである。

かつて文保課に在職中、文化財に関する各専門分野の技師を多く抱える職場として、研究紀要の出版を強く望んでいた一人として、今回の出版に至ったことを素直に喜びたいと思う。

筆者は、定年退職した2010年3月末まで文保課に所属し、その内25年間は京都市埋蔵文化財調査センター（以下「埋文センター」という。）に勤務、最初の嘱託職

員の期間を含めて36年間、技師として京都市に奉職した。定年後は（公財）京都市埋蔵文化財研究所（以下「埋文研」という。）に再雇用（次長）となり、2014年度は、京都市考古資料館（館長）も兼職して2015年に退任、1972年の大学卒業から発掘調査のアルバイトや嘱託職員の期間及び大学の非常勤講師期間を含めると、これまで44年間に亘って文化財保護に関係した仕事に従事していたことになる。

この紀要では以上の経緯を踏まえ、個人的に知る範囲で文保課の設立前後からの歩みと、これまで一番長く担当した埋蔵文化財の業務について論じてみたい。

なお、以下の記述は、『古代文化』第68巻第1号（（公財）古代学協会、2016年6



写真1 文化財保護課の定年退職前の2010年2月
文化財保護審議会でお世話になった先生方と文化財保護課職員（右から2人目が筆者）

月30日、及び次号の69号に投稿した「京都市の文化財保護44年を振り返って（その1・2）」を、さらに要約してまとめたものである。

2. これまでの主な業務の経緯

筆者は、1972年春に大学を卒業後、京都市で最初の文化庁国庫補助事業（埋蔵文化財）である羅城門跡、西賀茂鎮守庵瓦窯跡の発掘調査にアルバイトで参加し、その後、平安宮跡・六勝寺跡などの発掘調査を経験、その間に京都市が最初に出版した『京都市遺跡図・台帳』作成を担当して1972年に発行、京都市の記念物行政の仕事の第一歩を踏み出した。

同年、鳥羽離宮跡調査研究所（杉山信三所長）に所属して、鳥羽離宮跡や六勝寺跡、^{かやのもり}栢杜遺跡などの発掘調査を担当したが、出身が理工学部ということで専門知識が必要と考え、大学に戻って1年間考古学を履修した。その後も、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターで初めて主催された長期専門研修に参加し、さらに2回の専門研修に参加して、埋蔵文化財の保護に関する基本的な技術を身につけた。

1974年には、文保課の非常勤嘱託員となり、2年半後の1976年秋に技術員（現：文化財保護技師）に採用されて、主に埋蔵文化財を中心とした記念物行政を担当した。

1976年には、京都市がそれまで市内の発掘調査を行っていた任意の調査会（平安京調査会・六勝寺研究会・鳥羽離宮跡調査研究所・伏見城研究会）を統廃合し、（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下「埋

文研」という。）を設立し、右京区の花園に事務所を設けて、市内発掘調査の大半をこの財団が引き受けることになった。

その後、文化庁国庫補助を受けて京都市埋蔵文化財調査センター（以下「埋文センター」という。）が上京区の西陣に建設されることになり、筆者も担当者の一人として加わり、建物は1979年に竣工、花園にあった埋文研がここに移転して、同年11月には京都市考古資料館がオープンした。

翌年の1980年には、文保課から埋蔵文化財部門が独立して埋文センターへ異動となり、筆者はそこで埋蔵文化財に関する行政指導を担当しながら、1981年に京都府と同時に制定された文化財保護条例に伴って、各分野の専門技師が採用されることになり、その指導のために半月毎に文保課と埋文センターを行き来していた。

埋文センターでは、文化財保護法に基づく申請の受付や指導、埋文研やその他の調査機関との連絡調整、調査現場の指導や試掘調査などの業務を行っていたが、その後、四半世紀を経た2005年に、京都市の組織統廃合により、埋文センターは廃止が決定、元の古巣である文保課（岡崎の京都会馆）へ異動することになった。

2008年には、技師出身者としては初めて文保課の課長となり、2年後の2010年3月に同課を定年退職、退職後は先述のとおり、埋文研（考古資料館）へ再任用となり、平成26年（2015）に任期満了で退職、その経験を活かし、現在は京都女子大学文学部史学科（2001年から）、京都造形芸術大学歴史遺産学科（2011年から）の非常勤講師として、考古・歴史・文化財保護などの授業を担当している。

3. 文化財保護課の設立経緯ほか

京都市の市政が発足したのは1889年、市役所が1889年に開庁し、1930年に京都市観光課が発足、それが1941年に文化課となり、第二次世界大戦後の1947年に市役所内に文化局が誕生して、1948年には文化観光局が設けられた。

1958年4月1日には、京都市長と教育委員会委員長との覚書で、本来、教育委員会に属する業務である文化財保護（文化芸能）、スポーツに関する業務を、市長部局の文化観光局で補助執行することになり、1962年には京都市観光施設課内に文化財係が置かれ、1965年に文化財係が文化課に吸収されて保存係となっている。

1969年には、文化財修理や伝統行事に対して補助や助成をする、(財)京都市文化観光資源保護財団（以下「保護財団」という。）が発足、その翌年の1970年4月の機構改革で、文化観光局内に文保課が設けられ、京都会館内の執務室に上記の保護財団と同室で業務が開始された。

1970年当初の文保課は、課長以下6名全員が行政職員で、同年10月に京都市として初めての専門の文化財保護技師として浪貝毅氏が採用され、専門の非常勤嘱託職員も置かれて8名体制であったと記憶している。

最初の嘱託職員は面識が無く、二人目の岡田保良氏は、その後、国士舘大学のイラク文化研究所の教授のほか、ユネスコの元イコモス執行委員として世界遺産登録にかかわって国内でも広く活躍されている。

次の嘱託の玉村登志夫氏は、平安京跡を南北に縦断する地下鉄烏丸線工事に伴っ

て、京都市交通局内に高速鉄道烏丸線内遺跡調査会が発足し、その埋蔵文化財専門職員として採用され、その後、交通局から埋文センターに異動し、さらに2005年から文保課を経て2009年春に定年退職されている。

筆者は、先述のとおり、1972年から文保課でのアルバイトや鳥羽離宮跡調査研究所調査員を経て、前任の玉村氏の後任として、1974年4月から非常勤嘱託員として2年半勤めた後、1976年10月から正式に文保課の技術吏員（文化財保護技師）に採用された。この採用に当たっては、同年11月に設立された埋文研へ、浪貝毅氏が調査課長として出向したことによる欠員補充で、それ以後、文保課で一人の技師として多忙な業務を担当することになった。

4. 京都市の文化財保護行政

1971年の日本考古学協会『埋蔵文化財白書―埋蔵文化財破壊の現状とその対策―』には、「京都市内の遺跡は新築・改築の工事などにより未調査のまま無数に破壊された」との記述があり、この当時、市内にある遺跡に関する行政指導や調査はほとんど行われていなかったことを物語っている。

その前の1963年に京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文保課」という。）が、平安宮跡を公報に登載して理解を求めたことはあったが、それ以後は積極的な保護対策もなく、さらに1970年、京都市の開発部局に通達された助役通達「史跡・名勝・天然記念物の指定地域ならびに埋蔵

文化財包蔵地における建築確認申請に関する事務処理要領（1972年10月1日から実施）」があつたにも関わらず、埋蔵文化財包蔵地にかかる開発については一部しかチェックできていなかったのである。

1970年に文保課が発足し、記念物担当の主査1名が配置されていたが、当初の文保課の業務は、祇園祭や大文字五山送り火など、伝統行事に関する業務が主で、記念物に関しては、一部を除いて従前どおり府文保課に任せきりであつたと、後に京都府の技師の方から聴いたことがある。

京都市では、この当時の市内の土地開発や建築などの許認可は、法的許可権限を持つ行政指導部局が申請地内の遺跡の有無をチェックをしておらず、当然、文保課には文化財保護法に基づく届出¹⁾もされないことから、遺跡に関する行政指導を受けずに、工事着工が可能となっていたのである²⁾。

それが一変したのは、1970年秋に浪貝氏が技師に採用されてからで、氏は着任早々、京都市最初の文化庁国庫補助による発掘調査を実施し、浪貝氏の指示で京都市で初めての『京都市遺跡地図・台帳』を筆者が担当して作成、1972年11月に発行して京都市独自で埋蔵文化財の行政指導（ただし、当時の法的権限は文化庁及び京都府にあった）が行えるようになり、さらに遺跡地図は、数年毎に内容を見直して改訂し、内容の充実を図った。

この遺跡地図を使って、住宅局建築審査課や建築指導課のほか、消防局予防部指導課と協議を行って「事務処理要領」を作成、以後はこの要領に基づいて、遺跡内で行われる各種土木工事等の申請物件を開

発指導部局が遺跡地図と照合し、申請地に遺跡などが存在するかどうかのチェックが行われるようになった。

さらに、建築確認申請を最初に受理する各消防署の窓口には、遺跡のチェック漏れが無いように遺跡範囲を明記した2,500分の1の都市計画図の縮小版を作成して、詳しい遺跡範囲を閲覧できるようにした。

これらの制度改革により、申請地が記念物に該当する場合、指導部局は文化財保護法に基づく申請手続きが必要であることを指導し、それを受けて文保課では法的な届出や京都市文化財調査指導カードの提出を求めて、文保課の指導が終われば指導済証を交付し、その申請物件のみを消防署や開発指導部局が受理できるようにした。さらに遺跡地図も一般に販売して設計事務所や開発業者などにも積極的に普及啓発し、周知徹底に務めた。

しかし、市内の埋蔵文化財包蔵地の面積は広大で、その中で行われる各種土木工事の総てを同様に行政指導するのは不可能であることから、遺跡を重要度に応じてランク分けし、当初は一般遺跡とは別に平安宮跡、鳥羽離宮跡、六勝寺跡の3遺跡を重要遺跡として、遺跡内で工事をする場合は総て文保課へ届出が必要とし、後日、山科区にある中臣遺跡もそれに付け加えた。さらに、遺跡の重要度や過去の調査成果、工事規模や掘削深度などに応じて、発掘、試掘、立会、慎重工事等に指導を分け、臨機応変に行政指導できるようにマニュアル化を推進した。この当時、全国的にこのような行政指導を実施している事例は少なく、文化庁からも注目され、その情報で、多くの地方自治体が参考例として視察に

来られ、また情報提供の依頼もあった。

このように行政内部の改革を進めながら、浪貝氏の斡旋で、六勝寺研究会（木村捷三郎代表）・鳥羽離宮跡調査研究所（杉山信三代表）・平安京調査会（田辺昭三代表）のほか伏見城研究会など任意の調査会が組織され、市域内の発掘調査を担当してもらっていた。

その後、行政指導した調査がスムーズに行えるように、京都市がこれら任意の調査会を統廃合して1976年11月に埋文研（当初職員数22名）が設立され、その組織立ち上げ準備も筆者が手伝った。

これは、行政側が短期間に多くの職員を採用することは極めて困難であるため、京都府の認可を受けて財団法人の調査機関を設立することで、多くの専門のプロパー職員を採用することが可能になった。

このような経緯の中で、1972年2月には、学識経験者18名からなる「京都市文化観光資源調査会」が組織され、行政に対する外部専門委員の指導助言を受けられるようになり、後年の1981年には、全国で最も遅れて京都府と同時に「京都市文化財保護条例」が公布され、同調査会は翌年の1982年に組織変更されて「京都市文化財保護審議会」となっている。

これら文化財保護行政の改革を推進された浪貝氏は、埋文研の設立と同時に調査課長として出向し、その後、1979年4月に文化庁記念物課の調査官に栄転、4年後の1983年春には京都市の埋文センターの所長として帰任され活躍が期待されたが、惜しくも1992年12月に享年51歳で逝去されている³⁾。

5. 埋蔵文化財の行政指導 (平安宮跡・平安京跡)

遺跡地図を発行して遺跡の周知徹底に努めても、京都市内には約800箇所以上の埋蔵文化財が存在し、それらを代表する平安京跡は市街地のほぼ中央部にあり、東西約4.5km・南北約5.2km、北中央にあった平安宮（大内裏）跡でも、東西約1.2km、南北約1.4kmの規模を有し、その中では、日々開発工事が行われている。

このような大規模な都市遺跡をどのように指導し、保存のための調査を行うかは、行政にとっても極めて大きな課題であり、遺跡内で日々行われる各種土木工事等の届出（通知）を受理して指導するには、行政内部にそれなりの組織や人員を確保し、また発掘調査等の受け皿となる調査組織の構築も必要である。

京都府教育委員会で遺跡地図が作成されたのが1971年（翌年刊行）、京都市も翌年に遺跡地図を作成して行政指導を開始したが、先述のとおり指導マニュアルもなく、調査組織も脆弱で、まず調査の受け皿となる組織作りやマニュアル作りから始めなければならなかった。

当初の平安宮跡（鳥羽離宮跡・六勝寺跡を含む）は、重要遺跡として総ての土木工事等について届出が必要として行政指導を行っていたが、一方の平安京跡で行われる土木工事等は、公共機関や民間の大規模開発については指導をしていたが、民間を含めて周知の埋蔵文化財包蔵地として行政指導するようになったのは、文保課の内部改革を進め、調査の受け皿となる埋文研などの調査組織を設立して以後の1977年

からである。

平安宮跡は、地上に遺構は何も現存せず、豊臣秀吉による聚楽第や徳川家康による二条城の築城など、後世の開発等で攪乱された場所も多く、また遺構面が浅いこともあって残存状況は極めて悪い場所であった。

それでも、筆者が埋蔵文化財の行政指導業務に携わった頃は、京都府教育委員会のほか平安博物館や（財）古代学協会の努力により、ようやくその実態が解りかけてきた頃で、遺跡の大半はまだ五里霧中の状態であった。

この当時、届出に関する平安宮跡の行政指導は、京都市の市史編纂所発行『京都の歴史』付図や（財）古代学協会の角田文衛氏からご提供頂いた平安宮復元図のほか、奈良国立文化財研究所制作の平安宮復元鳥瞰図などを頼りに行っていた。また、在野の研究者の津田菊太郎氏から手製の平安宮復元図を提供いただき、文保課に持ち込んで行政指導に活用させていただいた。

平安宮跡の初期段階での発掘調査は、角田文衛氏らを中心に（財）古代学協会や平安博物館により、独自に解明が進められ、朝堂院跡の延祿堂・修式堂の基壇の一部や、推定豊楽殿跡東方で東西溝跡のほか、内裏内郭回廊跡（1979年に史跡指定）も発見、調査され、平安宮を復元する上で大きな成果を上げておられる。

また、この頃に奈良県の明日香で高松塚古墳の障壁画が発見（1972年）されたこともあって、発掘成果は地元新聞などマスコミにも取り上げられようになり、漸く市民の埋蔵文化財への理解も深まっていった時代である。

平安宮跡では、1973年から文保課も文化庁国庫補助事業として調査に参画するようになり、筆者は平安宮跡では、長殿跡、内裏跡、造酒司跡、中和院跡、小安殿跡、真言院跡、豊楽殿跡、太政官跡、会昌門跡、朝堂院跡、小安殿跡などの発掘調査のほか、市域全体の試掘・立会調査なども担当した。

最近までの平安宮跡では、埋文研の精力的な発掘調査により、朝堂院跡、豊楽院跡、内裏跡、中務省跡、造酒司跡など、平安宮の主要な宮殿官衙跡の遺構を数多く検出して復元も進められ、1977年からの京都市遺跡発掘調査基準点による基準点測量の導入と、今日に伝わっている宮城図などにより、平安宮跡の宮殿官衙の推定場所を地上に復元することも可能となった。また、調査成果を纏めた報告書も数多く出版^{4) 5)}されるなど、1970年代の平安宮跡がほとんど分からなかった時代に比べて、この40年近くの間、発掘調査成果により、平安宮の解明や復原が飛躍的に進んできたことは喜ばしい限りである。

次に平安宮跡は、1972年の遺跡地図に範囲を掲載されていたが、先述のとおり、1976年まで公共工事や一部民間の大規模工事を除いて、文化財保護法に基づく一般の土木工事等の届出など行政指導の対象とはなっていなかった。

平安宮跡を南北に縦断する1974年からの地下鉄烏丸線工事に伴う発掘調査では、旧二条城跡の発見など、平安宮跡には各時代の遺構・遺物が良好に残存していることが明らかとなり、さらに1976年には埋文研が設立され、一定量の発掘調査の受諾が可能となっていたこともあって、行政内

部で検討を重ねた結果、1977年の遺跡地図改訂で平安京跡を周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うことになった。

振り返れば、京都市内の埋蔵文化財包蔵地内の届出件数は、1971年には年間僅か2件が、1972年の遺跡地図発行後は119件、平安京跡が周知された翌年の1978年は747件、1982年には年間1,000件を超え、さらにバブル期の1989年には1,785件となり、一時は行政指導がマヒ状態となった。

また、この当時は、埋蔵文化財が市民がまだよく理解されていない時代で、所謂「原因者負担（受益者負担）」による指導件数も増加し、法的根拠の乏しいなかでの原因者との費用負担交渉や調査期間の確保など、説明や厳しい対応に追われ、精神的に追い詰められる日々が続いた。

そのような苦しい経過を経て、現在のように埋蔵文化財への理解も深まり、遺跡内での建築や土木工事の計画に際しては、事前に期間を含めて調査経費を見積もっておくような時代になってきたのである。

このような、平安京跡の発掘件数増加に伴い、平安京の実態が次々と明らかになっていったことも事実で、その成果の総てを網羅するのは不可能であるが、平安京条坊遺構、里内裏や高級貴族の邸宅である堀河院跡、高陽院跡、冷泉院跡、齋宮邸跡のほか、最近では藤原良相の西三条第（百花亭）跡が明らかになるなど、多くの場所で遺構・遺物が検出され、平安京復元にとって、大きな成果となっている。

最近では、これら発掘調査等の成果は埋文研などのホームページで誰でも閲覧できるようになっているのはありがたい。

6. そのほかに担当した 市内遺跡の調査

ここからは、筆者が担当した埋蔵文化財の調査について、記憶を頼りに振り返ってみたいが、京都市内での埋蔵文化財調査は、1976年以降は市内の発掘調査の大半を埋文研が行い、そのほか（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都府京都文化博物館や（財）古代学協会、民間の調査機関などが行っている。ここでは1976年以降、種々の事情により行政側がやむを得ず実施した調査及び私的な興味から遺跡解明を目指した調査等を含むことを諒とされたい。

筆者が最初に発掘調査を経験したのは、1972年春の平安京の正門である羅城門跡（南区唐橋羅城門町の唐橋花園児童公園）で、この発掘調査では、羅城門跡に関する遺構は何も見つからなかった⁶⁾。

その後、北区西賀茂にある平安時代前期の造瓦所のひとつである、鎮守庵瓦窯跡（北区西賀茂鎮守庵町）の発掘調査現場に参加し、3基のロストル式平窯と灰原のみの窯跡が検出され、緑釉瓦のほか「近」「中」銘軒平瓦や「官」ほかの刻印瓦も出土、平安京所用瓦の生産に関する実態解明に大きな成果となった⁷⁾。

次に鳥羽離宮跡調査研究所の調査員として行った鳥羽離宮跡（伏見区竹田・中島）の調査では、院政期の安楽寿院九体阿弥陀堂の大規模な地業跡の調査を担当した⁸⁾。

さらに1972年には、左京区岡崎周辺にあった院政期を代表する六勝寺跡の筆頭寺院である、法勝寺跡（白河天皇御願）の

調査に参加した。調査場所は、寺跡の推定東域に当たる動物園北東隅の爬虫類館建設地で、そこでは池の東岸の洲浜跡すはまが見つかっている⁹⁾。

次に担当した調査は、1975年とその翌年に実施した法勝寺の金堂跡の調査（左京区岡崎法勝寺町）で、二条通北側にある約2mの高台西端を調査したところ、高台は金堂の基壇跡であることが判明し、復元した金堂基壇は、東西約56m、南北約30m、高さ2m以上もある大規模なものであったことが判明した¹⁰⁾。

その後、六勝寺跡では尊勝寺跡で西限築地跡や西塔跡、その北方の店舗建設予定地から大量の瓦溜跡を調査し、平安神宮境内では東西溝を伴う築地状遺構を検出し、六勝寺復元に新たな成果を加えた。

1973年には鳥羽離宮跡調査研究所の調査員として、醍醐寺の子院跡である栢杜遺跡かやのもり（伏見区醍醐栢森町）を1973年9月12日から翌年3月末まで発掘調査を担当した¹¹⁾。

この調査では、敷地北側から一辺が約9mの平安時代後期に建立された八角円堂跡を検出、東側には付属建物が取り付き、眺望良好な西側からは庭園跡と舞台風の建物跡が見つかった。さらに調査地中央か



写真2 栢杜遺跡の八角円堂跡（南から）

らは、柱間寸法が6.09mもある方三間の建物跡が見つかり、建物跡の東側からは大仏様の建築部材が多数出土し、鎌倉時代に東大寺を再興した重源が建立した国宝浄土寺浄土堂（兵庫県小野市）と同規模の九体丈六堂跡と判明した。しかし、この時点で『醍醐寺雑事記』巻5に「大蔵卿堂八角二階 九躰丈六堂 三重塔一基…」にある三重塔が見つからず、その後、2001～2004年に先の調査地外の南方隣接地で発掘調査が行われ、三重塔跡（一辺10.3m）が新たに見つかった結果、栢杜遺跡は、北から八角円堂（二階建物）・方形堂（九体丈六堂）・三重塔が、中心間約42m間隔で南北に一直線で並ぶ特異な伽藍配置の寺院と判明した¹²⁾。

この遺跡は、1983年に史跡醍醐寺境内（飛び地）に追加指定後、改めて見つかった三重塔跡を含んで、さらに追加指定されている。

次に、1974年と1975年6～7月には、北白川廃寺（左京区北白川東瀬ノ内町）の発掘調査を担当した。

この場所は、考古学者で京都大学名誉教授であった小林行雄氏の自宅のすぐ近くで、白鳳期創建の五重塔跡（瓦積基壇を後に石積みに改修）の調査を行い、小林氏の指導を受けて調査を進めた¹³⁾。

調査した塔跡は、一辺13.6mの瓦積基壇を、後世の9世紀前半頃に一辺14.1mの石積基壇に改修したもので、法隆寺の五重塔に近い規模の塔基壇跡と判明した。

その後、しばらくは行政指導に専念していたが、1984年5～6月にケシ山窯跡群（北区上賀茂ケシ山町）の調査を行った。調査では、7世紀後半代の並列した2基の

瓦窯跡（^{あな}窖窯）と、そのすぐ隣接地の斜面から複数の横穴を持つ7世紀前半のタタラ遺跡に伴う炭焼窯跡2基を発見し、併せて発掘調査を行った。

2基の瓦窯のうち、向かって左の1号瓦窯跡は、斜面に沿って岩盤を掘り抜いた全長5.72mの有段式の窖窯で、右側の2号瓦窯は以前の造成工事で焼成室が大きく削り取られ1号窯よりも残りは悪かった。

瓦窯跡の調査中すぐ隣で見つかった2基の炭焼窯は、燃烧室（兼、焼成室）に9箇所の横口を持ち、製鉄に使用する高温で燃烧する白炭を生産する専用の炭焼窯であった。この炭焼窯に伴う灰原は、瓦窯に伴う灰原の下層に広がり、7世紀前半の須恵器（杯）のほか大小の鉄滓塊が見つかったことから、白鳳期の瓦窯の操業前に、製鉄関連施設が付近にあったことが判明、この地域で早くから製鉄が行われていたことを明らかにすることができた¹⁴⁾。

その翌年の1985年には、洛北の^{くるすの}栗栖野瓦窯跡（左京区岩倉^{はたえだ}幡枝町）の調査を行った。宅地造成工事に伴って行った発掘調査で、飛鳥・白鳳期から平安時代にかけての10基の窯跡が見つかり、そのうち6号窯は有段式の窖窯で、飛鳥・白鳳期に焼成途中の瓦を窯から取り出さないままの状態



写真3 栗栖野6号釜の残存瓦（7世紀）
写真は長谷川行孝氏

を保った窯跡と判明、当初、埋文センターの北田栄造氏と長谷川行孝氏の二人が発掘調査を担当していたが、急傾斜地に設けられた窖窯のため調査中の崩壊も危惧されるため、焚口から焼成室の7列目まで約4m分の瓦を取り上げ調査を終了せざるを得なかった¹⁵⁾。

その後、瓦を取り出した所まで重機が斜面を削り取った段階で、工事業者の了解を得て調査する機会に恵まれ、同年8月6日の僅か一日の猶予で、筆者と長谷川行孝氏と二人で、危険を覚悟のうへで窯内（16段）の瓦全てを取り出し、仮実測まで終えることができた。

取り出した瓦を整理した結果、この窯で焼成した瓦は、平瓦460枚、丸瓦81枚（総て行基式）の計541枚で、飛鳥・白鳳期の窖窯1基で焼成する瓦の数量は、平・丸瓦合わせて540～550枚であることが判明し、古代瓦生産の実態解明に大きく寄与する成果となった¹⁶⁾。

次に1985年の『京都市遺跡地図』改訂作業に伴って踏査した如意寺跡は、大津市にある園城寺（三井寺）の別院で、京都東山の一峰「如意ヶ嶽」南麓を、京都市左京区の鹿ヶ谷から大津市の園城寺を結ぶ約5kmの古道「如意越え」に沿って堂塔社殿が点在していた山林寺院である。

創建は、智証大師円珍ともされるが不詳で、平安時代中期、藤原忠平の日記『貞信公記抄』天慶元年（938）4月13日条に如意寺の記載があり、史料から創建は平安時代中期頃にさかのぼり、鎌倉時代には幕府の援助もあって最盛期を迎え、その後、15世紀後半の応仁・文明の乱以後に廃絶し、山中に幻の寺となった。

1985年から個人的な興味で山中の踏査を開始し、園城寺に伝わる古絵図（景観年代1312～36年）¹⁷⁾を頼りに調査を進め、途中で埋文研の調査員の協力も得て、約1年以上をかけて多くの建物跡を発見し、最終的には2年以上を費やして、古絵図に描かれた本堂及び子院の推定位置を明らかにすることができた¹⁸⁾。

この遺跡調査中に指導を賜った京都国立博物館の上山春平館長（当時）は、美術史研究と考古学研究の密接な交流と連携協力が必要であるとして、1986年2月、館長主催で各分野の専門家が集まって「如意寺研究会」が開催され、それ以後も博物館では3回開催され、大きな成果となった。

その後、この研究会は1990年に（財）古代学協会に引き継がれ、1990～96年に本堂・深禅院地区の発掘調査や東方の灰山遺跡の地形測量などが実施され、平安時代創建の山林寺院のあり方や伽藍構造、遺物からの考察など、実態を知る上で大きな成果をあげておられる¹⁹⁾。

次も遺跡踏査の成果の一つであるが、1988年に左京区大原にある寂光院の西方約1.5kmの山中にある遺跡（左京区静市静原町）を、地元の有志の方の案内で踏査した。その結果、谷筋の北斜面に複数の平坦地の存在と、平安時代にさかのぼる瓦や須恵器、緑釉陶器、土師器などを表面採集し、さらに作り出しのある礎石（花崗岩）も確認したことから、平安時代にさかのぼる山林寺院跡と判断した。

さらに恩師の杉山信三氏から『門葉記』をご教示いただき、その記述内容から天徳3年（959）4月19日条に、初め明燈寺

があったが廃絶、後の天慶8年（945）に僧延昌が花堂を草創したのが補陀落寺で、元は清原深養父^{ふかやぶ}の山荘があった所とする寺歴が明らかとなり、10世紀前半創建の山林寺院跡と判明した。さらに、この寺に関しては『今昔物語集』のほか、『平家物語』大原行幸には、後白河法皇が文治2年（1186）に落飾した建礼門院徳子を訪ねる途中、補陀落寺を叡覧されたとする記述もあり、地元民のちょっとした情報から、歴史上でも著名な山林寺院跡を発見、確認できた意義は大きいといえる²⁰⁾。

次に紹介するのは、1992年3月19～28日まで、智積院境内（東山区東大路通七条下る東瓦町）で行った祥雲寺客殿跡の発掘調査である。

天正17年（1589）、豊臣秀吉と愛妾淀殿との間に最初に誕生した鶴松（^{すて}棄君）は、天正19年（1591）に僅か3歳で夭折し、その菩提を弔うために前田玄以を奉行とし、妙心寺の南化玄興（虚白）を開山として、文禄2年（1593）に創建されたのが祥雲寺で、客殿内部は、長谷川等伯・久蔵親子ら長谷川派一門の絵師が揮毫を担当したと考えられている。その後、大坂夏の陣を経て豊臣氏が滅亡、徳川家康は慶長6年（1601）、先の天正13年（1585）に秀吉の紀州攻めで廃塵に帰した根来寺の子院である智積院に、この寺を「日本一番之寺」と称して与えた。

この祥雲寺の建物は、江戸時代の天和2年（1682）と昭和22年（1947）の2回の火災で烏有に帰したが、その都度、障壁画は僧侶たちが持ち出して伝え残り、桃山時代障壁画の最高傑作とされる国宝智積院障壁画がそれである。

1991年、智積院では、開祖^{かくぼん}寛鑿（1095～1143）寂弱後、850年目の遠忌事業で、1947年焼失の江戸期再建の講堂跡地に講堂再建を計画、旧講堂焼け跡の約850㎡を対象に同僚の長谷川行孝氏と発掘調査を行った。

その結果、焼けた講堂の真下から大規模な建物（客殿）跡を初めて発見した。検出した遺構上には二面の焼土層が存在し、下層が天和2年、上層が昭和22年の火災面と判明し、祥雲寺の客殿跡と判断した。

検出した客殿跡は、東西36m、南北23.1mと秀吉の意向を反映した全国最大規模の客殿建築であったことが明らかになり、長谷川派の障壁画に関する調査研究にも大きな影響を与える成果となった²¹⁾。

最後に、1985年の遺跡地図の改訂作業で確認した安祥寺上寺跡（山科区御陵^{みささぎ}安祥寺国有林）についてご紹介したい。

安祥寺は9世紀中頃、仁明天皇女御の藤原順子^{のぶこ}を願主、入唐僧惠運^{えうん}を開基として、現在の山科区の盆地北方に建立された寺院で、惠運勘録の『安祥寺資財帳』（以下『資財帳』という。）が伝え残り、上寺と下寺があったことや、上寺には、礼仏堂や五大堂などの主要堂宇を含めて13棟の建物や石童（塔）、宝幢のほか浴室には釜や湯槽があったと記され、寺跡は安祥寺国有林の標高約350mの山腹尾根上に残る²²⁾。

一方の下寺は、現在も京都府立洛東高校西側に法灯を伝えているが、江戸期に境内を毘沙門堂に割譲され、創建当初の下寺の元の位置は現在のところ不明である。

上寺跡は、1981年に京都国立博物館の八賀晋氏らにより地形測量が行われて初めてその実態が報告²³⁾され、筆者も

1985年の遺跡地図改訂作業の一環で安祥寺上寺跡を踏査して、遺跡が良好に残存しているのを確認し、資財帳の情報を含めて伽藍の復元を試みた²⁴⁾。

その後、職場関係の有志や顧問をしている京都女子大学考古学研究会の部員の協力で上寺跡の踏査を進め、表面近くに元位置を保つ礎石を多数発見、その成果を畏友の京都大学大学院の上原真人教授に相談し、上原氏の努力下、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラムの研究テーマに取り上げてもらえることになった。

2002年12月から京都大学、京都府立大学、花園大学、京都女子大学の教員や学生たちの協力を得て、礎石確認と測量調査を実施し、資財帳にある礼仏堂・五大堂・東西僧房・軒廊の堂宇跡のほか、資財帳に記載のない方形堂跡を発見する大きな成果となった。

COE研究会は、それ以後も、現在の安祥寺（下寺）の調査も含めて進められた。

その後、京都大学で何回かの研究会が開催され、歴史（文献）、美術工芸、建築、考古学等、専門の諸先生方の協力による学際的な研究となった²⁵⁾。



図1 安祥寺復原図（南東から）

7. その他の担当業務

(1) 京都市遺跡発掘調査基準点設置事業

平安京跡など大規模遺跡調査の情報統一を目指して、田中 琢・田辺昭三両氏の提言²⁶⁾を受け、文化庁補助事業を活用し、全国に先駆けて1977年から2年間「京都市遺跡発掘調査基準点」設置事業²⁷⁾を実施し、市内にある公立学校などの建物屋上や地上に70個所以上の基準点を設置した。これ以後、発掘調査現場では、この基準点から測量することにより、調査現場の測量図面は近畿座標原点からの直角座標(X・Y)で表すことが可能となり、離れた場所の調査図面を正確に合成、あるいは位置関係を知ることが可能となった²⁸⁾。

また、この成果から平安京復元モデルが作成され、平安京造営の精度を計測した結果、平安京造営尺は一丈(10尺)が2.9846668m、平安京の基準方位は北が西に0度14分27秒傾くことも判明、この数値と検出される条坊遺構の誤差は±1.1mとなり、平安京が極めて高い精度で測量して建設されていたことが証明され、さらに発掘調査前の測量により、その場所が平安京条坊のどの位置に当たるかが事前に分かるようになった²⁹⁾。

その後の2000年からは、精度の高いGPS測量により座標上の位置を求め、発掘調査現場の図面等が作成されている。

(2) 京都市埋蔵文化財調査センターの

設立と建設

現在の京都市考古資料館は、元は西陣織物館の跡地で、土地を京都市が買収、埋文センターを建設することが決まり、1978

年から筆者も整備担当に加わることになった。

大正3年(1914)竣工の煉瓦造の旧本館は外観を保存し、内部を改修補強して京都市考古資料館の展示室兼事務所とし、北側の旧事務棟は内部改修して埋文研を移転させ、調査室と事務室に活用、収蔵庫は新築する計画として文化庁補助金を受けて工事を進め、1979年に竣工した。

同年11月には、京都市考古資料館(文化庁の指導により考古資料館は国庫補助対象外)がオープンし、翌年4月には、京都市の文保課から埋蔵文化財担当部門を独立させて埋文センター事務所が開設された。

これにより埋蔵文化財に関する行政指導、調査・研究、収蔵、展示を統合した拠点施設が完成した。

しかし、この施設も先述のとおり、設置後25年を経過した2005年に、市の組織改革により埋文センター廃止が決定されて文保課へ統廃合されることになり、埋文研および文保課分室を残して古巣の京都公会館へ戻ることになった。

(3) 源氏物語千年紀

「源氏物語ゆかりの地」説明板の設置

『源氏物語』の流布が確認できる『紫式部日記』寛弘5年(1008)11月1日条から、2008年はちょうど千年目の記念すべき年(「古典の日」)を迎え、この年を迎える当たり、何か記念する事業ができないかということで、「源氏物語ゆかりの地」説明板設置事業を文保課のコンセプトとして予算要求した。

これは、これまで長年にわたる発掘調査

等により、平安京・宮跡など多くの場所で遺構が検出され、『平安京提要』に纏められた成果や、文献史料、古絵図などを使って復元すれば、『源氏物語』に登場する内裏の殿舎のあった場所を地上に落とすことが可能となり、地上に遺構が何も残っていない平安宮跡を中心に市内全域を対象にして説明板を設置しようと計画したもので、その予算が認められたのである。

2007年から翌年にかけて、同志社女子大学の臈谷 寿教授や、当時の上京歴史探訪館副館長の山中恵美子氏らにも協力いただき、筆者の描いたイラストも活用して、市内全域を対象に40箇所に説明板を設置し、併せて小冊子も作成して配布した。さらにその後も、文化庁からの助成金を活用して顕彰施設を増やし、過去の分も含めて、これまで平安宮跡だけでも40箇所の説明板を設置している。

(4) 遺跡復元イラストの制作

遺跡を保存するためには、行政が遺跡内で工事をする設計者や施工主側に懇切丁寧な説明と保存への理解を求めることは当然であるが、遺跡についての理解や知識が乏しい一般市民への説明には、専門的な遺構実測図ではなく、ビジュアルな遺跡復元イラストが必要であると考え、さらに行政指導にも活用できることから、遺跡を復元したイラストを平安宮豊楽殿跡が発見された1987年頃から描き始めた。

その後、1994年の平安建都千二百年記念の年の少し前、角田文衛氏から『平安京提要』巻頭に掲載する平安京復元図の制作依頼があった。

当時は行政指導のほか、翌年開催予定の

「甦る平安京展」の展示委員や平安京復元模型なども担当して多忙を極めた時期で、当初は締め切りにはとても間に合わないのも無理と返事をしたが、平安京に替えて平安宮復元図を作成することでお引き受けし、それから約4箇月間、個人的な休日や私的時間をほとんど費やして描いたのが「平安宮復原図」である。この図は締め切りの関係で京域の左・右京域を描くことができず、後日、京域部分を描き加えたのが京都市美術館で開催された『甦る平安京展』展示図録の巻頭カラーに掲載された平安宮復元図である³⁰⁾。

その後、発掘調査で成果のあったものなどから、建築などの専門の先生方のご指導を受け、現場担当調査員の意見を参考にして遺跡復元イラストを現在までに50枚ほどを制作し、博物館・資料館などの展示や図録、歴史図書、教科書や副読本などのほか、遺跡説明板など普及啓発に幅広く活用していただいている。

これら遺跡復原イラストは、2000年4～7月に花園大学歴史博物館で展示され、さらに2016年5月から約1年間、京都アスニーの平安京創生館で展示に供していただいた³¹⁾。

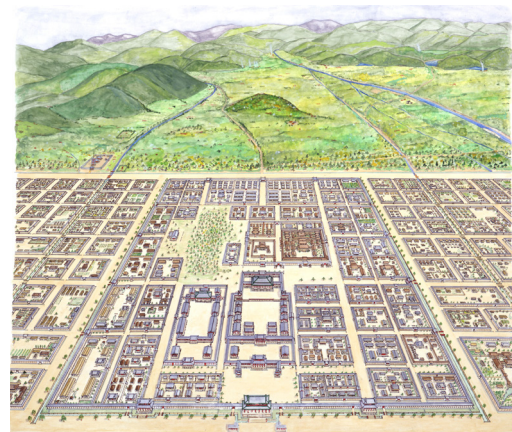


図2 平安宮復原図（南から）

8. おわりに

文保課は、1970年に岡崎公園内の京都会館（ロームシアター京都）で誕生し、当初は嘱託を含めて8名体制で業務が開始された。その後、執務室は京都会館別館（現：美術館別館）や市役所本庁舎内へ移転、さらに庁舎内でも移転し、2005年には古巣である京都会館へ一旦戻ったが、現在は、市役所本庁舎前のYJKビル2階に執務室が置かれ、職員数も二条城、歴史資料館を含めると職員数42名、嘱託5名

（2015年度）と、全国地方公共団体の中でも屈指の職員数となっており、発足当初からでは5倍以上の組織に変貌している。また、当初の組織である文化観光局から1995年には文化市民局（文化芸術都市推進室）となり、筆者が2010年春に定年退職した後も、組織改革が次々と進められているようである。

これまでの文保課のエポックとしては、1976年の埋文研の設立、1979年の埋文研の西陣への移転と京都市考古資料館のオープン及び翌年の京都市埋蔵文化財センターの設置（2005年廃止）、1981年の文化財保護条例の制定とそれに伴う専門技師職員の採用、1994年の「古都京都の文化財」のユネスコ世界遺産登録と平安建都千二百年事業の推進、2003年には清水寺近くに京都市文化財建造物保存技術研修センターがオープンし、2009年の課長時代には「京都の祇園祭の山鉦行事」がユネスコ無形遺産登録されている。この他にも文保課では大きなエポックは沢山あったが、ここでは紙面の関係で割愛させていただきたい。

以上、おぼろげな記憶を頼りに文保課のあゆみと、埋蔵文化財行政に携わった経験を交えて記述させていただいた。これから文化財保護に従事する方々へ、文保課の歴史の一コマを含んだOBからのメッセージとさせていただければ幸いである。

註・参考引用文献

- 1) 文化財保護法第93条「土木工事等による発掘届出」で、周知の埋蔵文化財包蔵地内で土木工事等をする場合は、着工する60日前までに市町村などの所轄の教育委員会へ届出をすることが明記されている。
- 2) 浪貝 毅「文化財レポート 平安京の発掘調査―都市再開発地域における調査の実態―」『日本歴史』1973年12月号、吉川弘文館、1973年。
- 3) 梶川敏夫「故浪貝毅氏を偲んで」『京都考古』第68号、京都考古刊行会、1993年。
- 4) 角田文衛ほか『平安京提要』、(財)古代学協会・古代学研究所、1994年。
- 5) 『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
- 6) 浪貝 毅・福山敏男「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1971、京都市文化観光局文化財保護課、1972年。
- 7) 吉本堯俊・上原真人「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1971、京都市文化観光局文化財保護課、1972年。
- 8) 杉山信三『鳥羽離宮跡』1972、鳥羽離宮跡発掘調査研究所、1973年。ほか
- 9) 六勝寺研究会編「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅱ、京都市文化観光局文化財保護課、1975年。
- 10) 梶川敏夫ほか『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅱ、京都市文化観光局文化財保護課、1975年。

- 梶川敏夫ほか「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975, 京都市文化観光局文化財保護課, 1976年。
- 11) 杉山信三ほか『栢杜遺跡調査概報』, 鳥羽離宮跡調査研究所, 1975年。
- 12) 南孝雄「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成16年度, 京都市文化市民局, 2005年。
ほか
- 13) 三上貞二・山口博・梶川敏夫『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』1975, 北白川発掘調査団・京都市文化観光局文化財保護課, 1976年。
梶川敏夫「北白川廃寺塔跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告—1975』, 京都市文化観光局文化財保護課, 1976年。
- 14) 梶川敏夫『ケシ山窯跡群発掘調査概要報告』, 京都市埋蔵文化財調査センター編, 1985年。
- 15) 北田栄造ほか『栗栖野瓦窯跡発掘調査概要』, 京都市文化観光局編, 1985年。
- 16) 梶川敏夫「京都洛北における造瓦窯—栗栖野瓦窯跡の追加調査—」『古瓦図』, ミネルバ書房, 1989年。
- 17) 泉 武夫「園城寺境内古図の製作年代」『古代文化』第43巻第6号, (財) 古代学協会, 1991年。
- 18) 梶川敏夫『如意寺跡発見への挑み』『園城寺』第56・57・58号掲載, 1986～1987年。
梶川敏夫「如意寺跡—平安時代創建の山岳寺院—」『古代文化』第43巻第6号, (財) 古代学協会, 1991年。
- 19) 江谷寛・坂詰秀一『平安時代山岳伽藍の調査研究—如意寺跡を中心に—』古代学協会研究報告第Ⅰ輯, (財) 古代学協会, 2007年。
- 20) 梶川敏夫『京都静原の補陀落寺跡—平安時代創建の山岳寺院跡—』『古代文化』第42巻第3号, (財) 古代学協会, 1990年。
- 21) 梶川敏夫『祥雲寺客殿跡の発掘調査』智積院講堂新築工事予定地の埋蔵文化財発掘調査報告, 真言宗智山派総本山智積院, 1995年。
- 22) 中町美香子・鎌田元一『安祥寺資財帳』, 京都大学文学部日本史研究室, 2010年。
- 23) 八賀晋「安祥寺上寺跡」『京都社寺調査報告』Ⅱ, 京都国立博物館, 1981年。
- 24) 梶川敏夫「山岳寺院」『平安京提要』, (財) 古代学協会, 1994年。
- 25) 京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム 第一四研究会編『安祥寺の研究Ⅰ—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』(『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』成果報告書), 2004年。
同『安祥寺の研究Ⅱ』, 2006年。
上原真人編『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』, 「王権とモニュメント」研究会, 2007年など。
- 26) 田中 琢・田辺昭三「平安京を中心とした埋蔵文化財発掘調査記録方法の改善について」『京都市観光資源調査会報告』, 京都市文化財保護課, 1977年。
- 27) 梶川敏夫『京都市遺跡発掘調査基準点成果表・点の記』, 京都市文化観光局文化財保護課, 1979年。
- 28) 浪貝 毅「考古学からの平安京研究」『平安京提要』, (財) 古代学協会, 1994年。
- 29) 辻 純一「条坊制とその復元」『平安京提要』, (財) 古代学協会, 1994年。
- 30) 梶川敏夫・長宗繁一『よみがえる古代京都の風景—復元イラストから見る古代の京都—』, 京都アスニー, 2016年。

かじかわ としお
梶川 敏夫 (京都女子大学・京都造形芸術大学非常勤講師, 元文化財保護課長)